



宮崎彌蔵

(1867~1896)

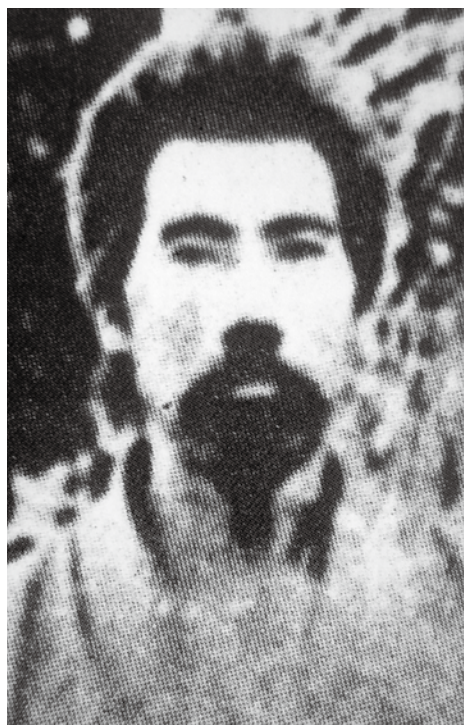
三兄・彌蔵は、兄弟中で優れて思慮深い人物であったといわれていて、また、滔天が精神的支柱として最も信頼した同志でもあっただろう。

長兄・八郎亡き後、日本における自由民権運動による革命が行き詰まりを見せる中、自由民権運動の可能性を中国に見出したのが彌蔵であり、滔天の目を中国に向けさせた人物である。

日本が国家として「脱亜入欧」を目指す中、彌蔵は中国革命によって西欧列強をアジアから追い払い、アジアの中の日本を民権国家として革命しようと考えた。それを 1891 (明治 24) 年、この思いを滔天に打ち明け、互いに中国革命を目指すに至るのである。

彌蔵はこの志を遂げるために中国人になり切ることを決意し、1895 (明治 28) 年に家族と音信を絶ち、横浜中国商館に入居。弁髪 (北東アジア民族の男子の習俗で、頭髪を一部を残して剃り、残りの毛髪を伸ばして編んだもの) を結い、名前も菅仲甫と中国名に改め、革命の機を待った。

しかし翌 1896 (明治 29) 年、腸結核がもとで横浜にて命を落とした。享年 30 歳。彌蔵の死は、滔天を一時茫然とさせた。しかし滔天は彌蔵の死を乗り越え、活動により一層身を沈めていく。



宮崎民蔵

(1865~1898)

次兄・民蔵は、八郎亡き後の宮崎家の当主であり、兄弟で最も長く生きた。土地所有制度の変革を終生の使命としながら、彌蔵と滔天、2 人の弟たちの革命活動を支えた。孫文の存在をいち早く滔天に知らせたのも民蔵であり、死の床に就いた孫文を見舞うことを許された数少ない日本人の 1 人でもある。

1880 年 (明治 13) 年に家督を継いだ頃から、土地の問題に着目。自由民権思想を一步進め、万人による土地の均等所有を人類の基本的権利とする「土地復権論」を提唱。アメリカ・イギリス・上海などに洋行と移住を繰り返しながら、生涯普及活動が続けた。1905 (明治 38) 年に出版した「土地均享 人類の大権」は数回の版を重ね、のちに孫文が掲げた中国革命の基本理念である「三民主義」にも大きな影響を与えたとされる。

当時、土地復権運動は危険思想視され、厳しい弾圧を受けて解散に追い込まれた。辛亥革命後は北京を拠点に日本と中国を行き来し、中国の革命家たちを支援しながら資金を得るため商事に専念したが成功せず、民蔵は荒尾で没した。しかし土地復権の種は、戦前の青年たちに引き継がれ芽生えていた。第二次世界大戦後、GHQ は農地改革を進めるべく日本政府に資料を求めたが、すでに農林省によって民蔵の思想が研究されていたことから直ちに提示できたという。



宮崎八郎

(1851~1877)

「九州のルソー」と呼ばれた宮崎八郎は、徳富蘇峰に「熊本における民権論の、唯一と云わなければ第一の急先鋒」と評された人物である。

兄弟は本来、男 8 人・女 3 人の 11 人兄弟であったが、5 人が夭折し、彼が事実上の嫡男でもあった。

1862 (文久 2) 年、荒尾出身の月田蒙斎の月田塾で学ぶために荒尾を出て、1865 (慶応元) 年、蒙斎の推薦で藩校時習館に学んだ。1870 (明治 3) 年に東京遊学を命じられ、そこで中江兆民によるルソーの「社会契約論」の部分約「民権論」に強い影響を受けた。1875 (明治 8) 年には自由民権を掲げ、熊本に官費で植木学校を設立したが、政府にとってその活動内容が過激であったことから、半年で閉校することになる。

八郎は自由民権論者として中央にも知られる存在であったが、西郷隆盛挙兵の声を聞き、1877 (明治 10) 年、協同隊を組織して西郷方として西南戦争に駆けつけた。自由民権論者・八郎が、袂を分かたずの反民権的な旧武士に与したのは、「西郷に天下を取らせてまた謀反する」という本意のもとであった。同年 4 月 2 日、武運つたなく八代で戦死した八郎を迎えた父・長蔵は「生涯官の飯は食うべからず」と叫んだと言われる。

享年 27 歳、八郎の早すぎる死は、遺された 3 人の兄弟が歩む道に強い影響を及ぼした。

辛亥革命や孫文に視点を当てると、宮崎兄弟の中では直接的に大きな役割を果たした末弟・滔天に注目が集まる。しかし、宮崎家が長年培ってきた歴史と家風、両親・兄弟など家族が与えた影響を抜きに、滔天の業績を語ることはできない。

今回は宮崎家の四兄弟の人生に、次号では宮崎家を支えた女性たちに焦点を当てる。

宮崎家のルーツと父・長蔵

荒尾の宮崎家の歴史は、1647 (正保 4) 年、初代の正之が肥前から肥後に入国したことから始まるとされる。

正之は 1667 (寛文 7) 年には肥後藩から一領一正の郷士 (鎧一領・馬一頭・両刀の所持を認められ、有事以外は農業に従事する武士) に任じられた。やがて他国御横目役として肥前方面の探索・情報収集に従事し、知行 20 石を受けた。その後 8 代目政明まで、世襲郷士として玉名郡内の諸役を務めた。

兄弟の父・長蔵 (政賢) は 9 代目にあたり、当時の宮崎家は荒尾村随一の地主であった。長蔵は学問のみならず、軍学や砲学、剣術を学び、宮本武蔵が完成させた二天一流の武芸者であった。九州での修行では飽き足らず、全国を武者修行した記録があり、子どもたちにも伝授している。また、地主としての長蔵は、日頃から村内の人々にも身分の分け隔てなく接し、正月の賀客を待つにも全て到着順に受け、当時としては「四民平等」の先覚者でもあった。

また、滔天は著書『三十三年の夢』で父・長蔵が「豪傑になれ大将になれと、日に幾たびとなく余が頭を撫でて繰り返したまいし」ことと、母・サキもまた「畳の上に死するは男子なよりの恥辱なり」と常に戒めていたと記していることから、武士の家系たる強い自尊心が伺える。

宮崎家が荒尾に定住して 200 年余りの後、兄弟がさまざまな社会運動に身を投じていく背景には、明治維新时期という時代の大きな変化と、郷士としての強いアイデンティティ、そして「四民平等」という自由民権主義の先駆的精神性が根底に流れていたからである。